ながらよく命が助かったものだと思った。過ぎた歳月が苦しかっただけに、喜びも大きく感じた。食糧事情もソ連へ入った当初より年々少しずつよくなり、気候や作業にも慣れてきたが、やはり異国はいやでした。

長い抑留生活、四年後ソ連軍の命令で、昭和二十四年九月十八日舞鶴港へ上陸、復員、帰宅できた喜びは忘れられないが、しかし、ソ連抑留の苦労も忘れることはできない。

今後は戦争はすべきでなく、平和であってほしい。異国の地で無念に亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

我が空白の青春

新潟県　関口　義　作

悪夢のような、八月九日、四十九回目のその日が今年もまためぐってきた。私たちの命運をかけたソ連軍の不法侵入の日である。

私はちょうど衛兵勤務の日であった。九日午前零時五分ごろ、突然異様な爆音がソ連領方向より聞こえてきた。仮眠中の兵員全員哨舎外に飛び出し、警戒態勢に入った。間もなく薄暗い空に数十機の軽爆撃機らしき編隊が清津、羅南方面に向かって突進して行った。早速中隊本部に報告し、なお散発的に飛来する敵機に迎撃態勢をとった。既に清津港、羅津は猛烈な空爆に曝されていた。

最初は米軍機かと思っていたが、それは、あまりにも情報不足の前線兵士の無知と、上を信じて忠誠一途に生きてきた若者たちの判断だった。

未明になると隣接地区の咸林山の展望哨が砲撃され始め、その砲煙と砂塵で山形が確認できないほどすさまじい砲撃だったが、健気にも監視所の重機が一銃応戦していたのもつかの間で、やがて沈黙した、おそらく全員無念の最期を遂げたことだろう。

そのころになって敵は米軍でなく、ソ連軍がわが国との不可侵条約を破棄して攻撃してきたことが知らされた。いつかはと覚悟していたものがついにきたのだ

と戦慄が全身にほとばしり、「生も死も」ただ運命まかせ、ただ見苦しい死にざまでないようにと神に祈るのみでした。

私たちの部隊は羅南十九師団から派遣された「独立一〇一連隊」混成部隊で、砲兵が多く、歩兵中隊にも重火器が多く、機動力はなかったが侵攻して来る敵を迎撃出来る火力は十分あったように思った。

夜明けを待って全員営庭に集合し、中隊長市村中尉の訓示がなされた。一同東方を向いて皇居遥拝し、水盃を交わして必勝を祈念した。

各小隊ごとに所定の陣地配備につく間にも、どこからか飛来する砲弾が国境を走る鉄道の「洪儀」駅に集中して、鉄道の輸送力が壊滅した。

十一日夕刻、命令により陣地を撤退して関東軍に合流するため、携行できる兵器のみ持って隠密裏に雄基嶺を越えて会寧方面に撤退することになった。村の百姓から牛一頭借り最後の砲一門を引かせて、避難民を保護しつつ、三合里村の峠近くで砲撃する敵に一撃を加えるべく布陣した。しかし敗色の濃厚となった今では、口にはしなかったが、だれもがこれが最期の地かと思ったに違いない。

八月二十日、関東軍から連絡将校が来て終戦の詔書を口達され、ポツダム宣言の要旨も全員に伝えられた。「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」の戦陣訓が不要のものとなり、八月二十二日、会寧橋の下の川原で武装解除となった。

その日から三カ年間の屈辱的な「生と死」紙一重の人間の限界の生活が始まったのだ。四囲に重火器を据えての昼夜厳重な監視の下で、一夜ろくろく眠ることもなく朝を迎えた。「ダモイ東京ダバイ」「ヤポンスキー」とけしかけられて、富寧のカーバイド工場の職員寮に落ち着くことになった。十畳くらいの部屋に何人だったか、ちょうど魚の目刺しの干物を並べたようなスペースに閉じ込められた。まずソ連兵の昼夜を問わずの略奪が始まり、銃口を向けては腕時計、万年筆、貴重品類などめぼしい物は皆取られてしまった。私は軍袴を取られた。さすがにそれには困った。ちょうど隣の班の萬羽久司氏がどこからか員数外のを一枚見つ

けてきてくれて大いに助かった。そのズボンを三年間舞鶴に上陸するまで着用した。さすがにつぎはぎだらけで、今あったら博物館にでも展示されるだろうか。何といっても一番不足なものは食料で、スターリンの給与規定など全くの空念仏で、死なない程度の給与で皆、骨と皮ばかりになってしまった。そこにシラミの媒介で発疹チフスが蔓延し、多くの犠牲者が出た。その中から割合健康な者が、五百人単位の作業大隊を編成してシベリアの奥地に送られることになった。例の東京ダモイで貨物列車に乗せられ、三日くらい走り、駅でもない所に降ろされた。人跡未踏の密林を伐採して道路を作る作業だ。

貨車からおろされたところは、後で聞いた話で「サンタゴ」という三十戸くらいのコルホーズのようでしたが、村民と接触することはなかった。作業には各人「ノルマ」があり、道路建設だと一日二・七五立方メートルずつの土を移動しなければならなかった。一カ所十人ずつで山の斜面を切り開き、五メートルくらいの幅員で道路を作る重労働だ。終わらないと日没になっても帰ることができなかった。幸い通訳の人が土量計算等してくれたし、また哨兵には立方体の計算などできなかったので、その点いささか抜け道はあったようだ。が、何しろノコギリ、オノ、スコップとツルハシだけしかない集団だから、工事が進むにつれ奥地へ奥地へと進んで行くわけで、住居は松の木の皮を屋根にのせ雨露をしのげるだけの小屋に枯れ草を敷いて「ゴロ寝」である。入浴も洗濯もない。ただ食べたいことだけで、他に考える余地などなかった。糧秣を積んだ車がエンコしたか三日くらい食べ物がなくて、さすがに川辺まで水を飲みに行くにも這って行ったことがあった。今でもそのときのことを戦友の今井義員氏と会えば思い出して、当時の苦しかったことなど話は尽きない。人間の生と死の極限に達したときの心理状態は、平和の現代の人々には想像も説明もできないことが多い。

私事になるが、三カ年の抑留生活中、死に直面したことが三回あった。一回は栄養失調で倒れ、二回目はバレイショ畑の掘り残しを拾いに行ってソ連将校に見

つかり、川原に連れて行かれ、間一髪のところ、粥塚隊長と水谷通訳のお陰で命を助けてもらった。そのときの粥塚隊長から「自らの墓穴を掘るようなことはするな」と注意を受けた言葉は、私の生涯の戒めとして現在も生きているし、私のために必死で通訳してくださった水谷氏も今は故人となられてしまったが、心より御礼申し上げ、御冥福をお祈りいたしております。

やがてソ連政治局の指導により若いアクチーブがやって来て、訳のわからないような「唯物論」や何やらが始まって民主主義革命ののろしが上がった。反軍闘争からインテリゲンチアまでつるし上げになった、日本人同胞が互いに血で血を洗う陰惨な闘争が日夜繰り返された。私にはどうしても心底より共産主義思想に同調できなかった。しかし表面上はあくまでも共産主義者でなければ帰国できなかった。

昭和二十三年十月二十日、スターリン元帥に感謝決議と、天皇島に敵前上陸し日本に民主的革命を起こすのだと言う口実で引揚船「朝嵐丸」に乗船することができた。

朝嵐丸での給食は白い米飯とたくあんだった。三年余り口にしたことのない日本の味だった。「国破れて山河あり」とか。まだ祖国は健在である、きっと再建できると心に誓った。

故郷の家ではすでに両親は他界したのだし、一人婚期を逸した姉が家を守っていてくれるだろうか、二人の弟は無事帰還できただろうか、いろいろと思いめぐらして涙が止めどもなく流れ、舞鶴港の松の緑が目にしみる八年ぶりで見る祖国の土、今踏むことができる喜びと感激の涙だったのだろうか。

私のシベリア抑留記

岐阜県　猿渡秀夫

昭和十九年八月、静岡県浜松市外三方原、中部第一三〇部隊入隊。

昭和二十年一月、第一期検閲終了。一月十五日、北支派遣軍一九一五四部隊に派遣されることになる。二